

ブックデザインと文字組版デザインを中心とした戦後デザイン動向の研究 A study of postwar design trends focusing on book design and typesetting design

赤崎 正一 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
戸田 ツトム デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
寺門 孝之 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
橋本 英治 先端芸術学部まんが表現学科 教授
荒木 優子 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 准教授

Shoichi AKAZAKI Department of Visual Design, School of Design, Professor
Tzutom TODA Department of Visual Design, School of Design, Professor
Takayuki TERAKADO Department of Visual Design, School of Design, Professor
Eiji HASHIMOTO Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Professor
Yuko ARAKI Department of Visual Design, School of Design, Associate Professor

要旨

出版メディアにおけるデザイン動向は、広告など他の分野と比較して、実験的・先端的な傾向が強い。組版設計をふくむ広義の「ブックデザイン」のそうした傾向には日本語固有の組版システムの複雑さがもたらす、実験的組版の広汎性も要因のひとつと考えられる。

事例として2009年度のビジュアルデザイン学科における3回の特別講義を取り上げる。それぞれの講師は、絵本作家・イラストレーターの木内達郎氏、アートディレクター・ブックデザイナーのミルキィ・イソベ氏、グラフィックデザイナーの松田行正氏の3氏である。ブックデザイン・組版デザインに長年携わってこられた、これらの方々の講義には、さまざまな作品紹介を通じて、多様な「ブックデザイン」の実験的試みが含まれている。

ブックデザインの戦後的動向の先端や特異点を構成する3氏の特別講義はわれわれの研究に大きな示唆をもたらすものである。

それら、事例紹介も多く盛り込まれた特別講義を単行本「デザイン・プレゼンテーションの哲学」として編集・刊行した。

そして、この単行本の制作自体がブックデザインやエディトリアルデザイン（組版デザインを含む）の実験的実践なのである。

Summary

Design in publication media are inclined to be experimental and edgy compared to that in other fields such as advertising. This characteristic of "book design" in the broad sense of term is attributed in part to the prevalence of experimental typesetting caused by the complex typesetting system intrinsic to the Japanese language.

This course explored three special lectures presented by Department of Visual Design in fiscal 2009. The speakers of the lectures were Mr. Tatsuro Kiuchi (an illustrator and picture book author), Ms. Milky Isobe (an art director and book designer) and Mr. Yukimasa Matsuda (a graphic designer). In these lectures, the three professionals, who had long been involved in book design and typesetting design, talked about diverse experiments in "book design" through various projects.

Their special lectures, discussing the cutting-edges and uniqueness of the post-war book design trends, offered inspiring insights in our study.

We compiled and published a book based on the three lectures introducing many cases of experimental book design titled *Philosophy of Design Presentation*.

The production of this book was an experimental practice of book design and editorial design (including typesetting design).

1) 目的

わが国における戦後デザイン動向のうちで、グラフィックデザインについての発展については、他のデザイン・カテゴリーとの関係性の中で論じられることはきわめて少なかった。歴史性を踏まえた上での批評的検証は、現在に至るも決して充分なものではない。だが、21世紀も10年を経た今日にいたって、ある種の眺望が開きかけていると我々は考える。それには以下のような理由が考えられる。

① おそらくは60年代末から、まず政治的社会的露頭において明らかになりはじめた「近代」の齟齬が、半世紀近くの年月の厚みの中で、あらゆる文化的側面においても実体的に見えやすくなって来たことがある。「近代」そのものの核の部分に淵源を持つと、誰もが疑わなかった「近代デザイン」が、わが国における展開においては、その「近代性」において実はかなり限定性を持ったものに過ぎなかったのではないかと思われる。とりわけ、日本語の文字組織・文字組版制度に強く依存するグラフィックデザインの領域においては、誰もがその事実を仕組まれた無意識のうちに、論ずること自体を回避してきたという、強い共同的心性があったのではないだろうか。

② いまひとつは60年代にはじまる対抗的カリフォルニア文化の中に起源を持つPC / IT文化が、全世界的に、人間の日常性のレベルを完璧に浸潤した現在の事態そのものである。「IBM / ビッグブラザー」的なものから「Mac / デスクトップ」的なものへの、なし崩し / 横滑りの移行は、今日ひとつの局面として、われわれに「電子書籍」という課題を直面させたが、それ自体はきわめて未成熟であり、ある種の「執行猶予」にすぎないものである。ただ、ここで露わになった、さまざまな「限界」がわれわれに、従来あった文字・紙・冊子形式による印刷 / 出版ひいてはDTP / グラフィックデザインなどの、それら総体を真に見直す契機を与えてくれた。

以上の2点は、実は「気付いてみれば何でもないこと」であるのだが、それだけに人間が時代状況に、どれほど拘束されているかということの証左でもある。



単行本「デザイン・プレゼンテーションの哲学」本文、木内達郎氏の講義ページ。

インの持つ、深く多様な「近代デザイン」相対化の傾向を表現として提示し続けている代表者でもある。

特別講義の場では、そうしたデザインの現場の「生」^{なま}の言葉でプレゼンテーションが行われたが、その聴講は稀少な一回性の体験として、かけがえのないものであるが故に、そしてまた一方では、他者の言葉として記録されることによってこそ、はじめてある種の永続性（確定性）を獲得するものである。本研究における計画と目的は、この点においてこそ意義が確信される。なによりそれは「本」が人間にとって必要とされる最大の動機であるからだ。

「本」のもつ物質性は、しばしばその本来の機能としてのメディア性を裏切って、われわれに予想外の体験をもたらすことがある。それはまた、デザインするものの主体（デザイナー）にとってはデザインの操作の不可能性を突きつけるものであり、同時に未知の可能性を開示するものでもある。

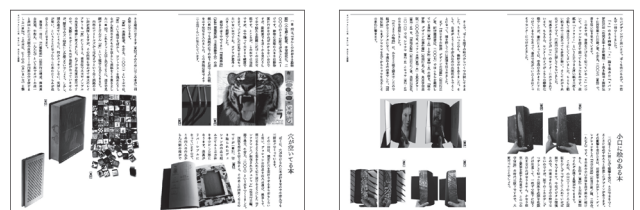
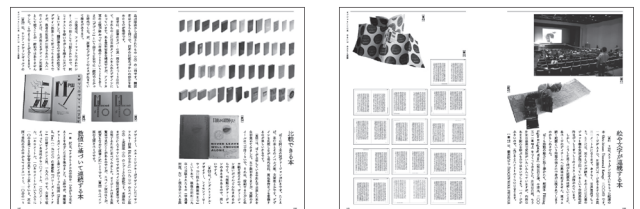
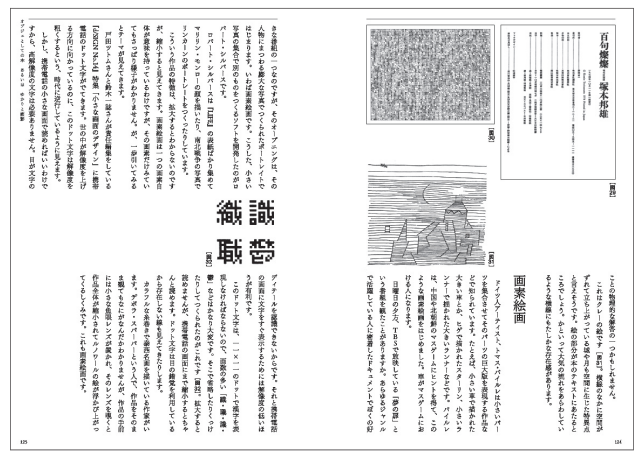
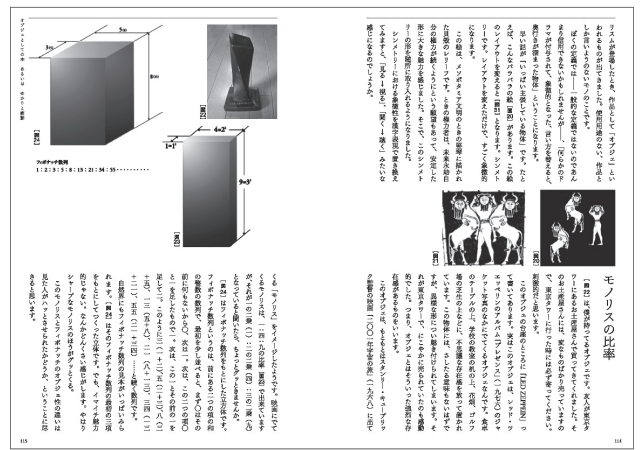
こうして、ここに単行本として定着された「記録」は明らかに（聴取の）体験そのものではない。そしてまた、それは体験の再現を目指すものではない。それはまったく新しい別の媒体であり、デザインの作業が介在することによって、もうひとつの、作家と作品の世界の射影された「領域」として、世界内に生成されるものだ。

デザイン（エディトリアルデザイン）はしばしばレイアウトの「操作」の技術として語られがちであるが、実は文字（書体）・画像・紙などの物理的な配置による「もうひとつ」の構築的過程でもあるのだ。

いはば別の次元への実体化であり、そこにこそ書物の成立の意義と秘密（のようなもの）の根幹が潜んでいる。

そうした認識のもとに、本研究のエディトリアルデザインの作業は試行的な実践として位置づけられる。

そしてさらに述べれば、以上のように、本研究は「デザイン」とその作業をめぐるきわめて自己言及的な「探索」であるとも言える。しかも結果として提示されるのは、「言説」としてテキストデータに還元されてしまう「情報」ではなく、実体としての「本」であることこそが、なにより本研究を特徴づける最大の「意味」なのである。



単行本「デザイン・プレゼンテーションの哲学」本文、松田行正氏の講義ページ。